

## 住民の声で街並みが生まれ変わった ニセコ町・綺羅街道

平成14年度都市景観大賞の「美しいまちなみ優秀賞」にニセコ町の綺羅（きら）街道が選ばれた。都市景観大賞は、美しいまちなみを創り、育てるために、行政と住民が協力し、ハードとソフトを組み合わせた総合的な取り組みをしている地域を表彰しているものだ。住民の声を取り入れながら、美しい街並みを創り上げた綺羅街道を訪ねた。

### 完成までに14年の歳月

綺羅街道は、道道岩内洞爺線（道道66号）の一部で、ニセコ町の中心市街地である本通地区のメインストリートのことを指す。

綺羅街道のそもそもの発想は、昭和63年にニセコ大橋が着工（平成6年11月に開通）されたことに始まる。これまでニセコ町の市街地は、足を止めるようなスポットもなく、冬場に多くのスキー客がやってくるにもかかわらず、観光客の通過点となっていた。また、商店街も後継者不足で、中心市街地は衰退していく一方であった。ニセコ大橋は尻別川にかかる橋で、完成すると、ニセコ市街地の本通商店街を抜け、駅前を経由せず、迂回しなくてもスキー場やペンション街に向かうことができるため、観光客にとっては非常に便利なルートとなる。

ニセコ大橋の着工が決まり、地元商工会の青年部では「ニセコ大橋ができて道路が良くなっても、街そのものがよくならなければ活気は戻らない」と、町に本通商店街の道道拡幅などを具申、その



整備前（写真上）と整備後（写真下）の綺羅街道

後、街の有志なども加わり、平成4年には、町、商工会、事業団体などが組織するまちづくり推進協議会が設立された。こうした地元での積極的な活動が評価されて、平成5年には、本通商店街地区が北海道の「マイウェイアワーロード事業」に採択され、道路拡幅などを含めた道路改良事業が行われることになった。

これを契機に、積極的な取り組みが、住民と行政の間で進められる。まちづくり推進協議会では、1年半の間に行政・商工会・事業団体・住民らが集まり、80回以上の議論の場を設け、どんな街並みがニセコにふさわしいか、どんな通りにすべきかなどを議論する。そして最終的に行きついたのは、ニセコの四季の彩りをコンセプトにした街並みであった。綺羅街道の名は「春は、川面がキラキラ 夏は並木がキラキラ 秋は、大空がキラキラ 冬は、雪がキラキラ」というニセコの自然を包括する“キラキラ”という言葉からきている。そして生活者のための街の道という意味からあえて街道という言葉を選び、綺羅街道と名付けた。

その後、これまでの議論を具体的に推進するためにニセコ綺羅街道推進会議を設立、沿線沿いの

商店や住宅の建て替えを視野に入れ、平成7年には、建設コンサルタントの協力も得ながら、具体的にどのような景観づくりをしていくのか、話し合いを重ねる。その中では、住民の意向を踏まえながら、建物の色や外壁、窓枠、看板等の屋外広告など、10の協定項目を設けた街並み形成ガイドラインを策定している。

一方、行政は、こうした取り組みを形にしていくために、平成7年に商工観光課の中に街づくり推進係を設置（翌年街づくり推進課に昇格）、平成8年には「ニセコ町街なみ環境整備事業」として、国の事業認定を受けることとなる。この事業認定により、建築設計費、住宅等修景費、建築設備等修景費などの補助が受けられるようになり、さらに町では中小企業者のために利子助成を行うことも決定した。

道道岩内洞爺線改良事業は平成7年から、ニセコ町街なみ整備事業は平成8年から着手され、小さな町では採算面でなかなかクリアできない電線の地中化についても、平成10年、北海道電線類地中化協議会においてニセコ綺羅街道の電線類地中化の合意を得ることができ、電線類の地中化にも着手。平成14年2月に道路改良事業、街なみ環境整備事業がともに完成し、ニセコの新しい顔ともいえる綺羅街道が14年の歳月をかけて誕生した。



突き出し看板は平成13年度の北海道屋外広告コンクール「北海道知事賞」を受賞



名称入りの住居表示板

## 8割以上の住民が建て替えを決意

綺羅街道にはいくつかの特徴がある。堆雪スペースを考慮したという6m幅の広い歩道。バスストップや案内看板、標識板などは全て木を基調とし、てっぺんは山をイメージした三角形。建物には綺羅街道の名入りの住居表示板。商店や事業所には、業種をイメージさせる突き出し看板。なんと信号柱まで他の標識板とおそろいの姿で統一されている。

電線の地中化についても同様なことだが、電線類の管理者や信号機の管理者らがこうした取り組みに同意してくれなければ、なかなかここまでの統一性は実現できない。住民が望む街並みを実現するため、行政と住民が一緒になってこの事業に取り組んでいることの理解を得ようと、町長と職員、住民の代表がそれぞれの管理者にお願いに行ったという。

また、こうした商店街の近代化に取り組む場合、後継者がいないこともあり、建て替えずに移転してしまう人も少ない。しかし、7割ほどが後継者のいない商店であるにもかかわらず、綺羅街道では一般住宅も含めて76戸のうち62戸が建て替えを決意。引越しのわずらわしさや初めての建て替えに不安を訴える住民も少なくなかったが、町職員が1軒1軒家を訪問し、説得をした。お年寄りであれば、新築にしなくとも、補償金をもらって団地に越す、娘や息子の家で余生を暮らすという選択もあったはずだが、最後は友達がいる地が一番、死ぬ時は自分で生まれた場所だという思いがだんだん強くなってきたという。

## 調和の取れた建物設計の仕組みづくり

案内板やバスストップなどの統一だけでなく、



1軒1軒の設計図を住民自らがチェック

綺羅街道にある62戸の住宅は、1軒1軒個性がありながら、美しい調和が保たれている。それを実現したのが、ニセコ綺羅街道住民会議の中に設けられた街づくり協定運営委員会だ。そもそもニセコ綺羅街道住民会議は、綺羅街道沿いにある5つの本通町内会会員、いわゆる住民が会員である組織だが、その中に住民代表と街づくりコンサルタントで組織する街づくり協定運営委員会を設けた。街並み形成ガイドラインを作成したことはすでに述べたが、どんなに立派なガイドラインを作っても、個々の家や商店が勝手に設計を依頼してしまえば、調和の取れた街並みにはならない。そこで、住宅の建て替えを行う場合は、きちんとルールの守れる設計チームをみんなで選び、さらにその設計会社をチェックするために「街づくり協定運営委員会」を設けたのだ。住民が選んだ4社の設計会社が個々の住宅や商店を設計するのだが、その設計図をガイドラインのルールが守られているか、全体の調和がとれているか、隣同士でミスマッチがないかなどを、住民代表と設計に詳しい街づくりコンサルタントが調整、助言を行うというものである。

当初は、自分の家にそこまでという声もあり、またハウスメーカーや親類の設計会社を使いたいなどの要望もあったが、まずはやってみようとする

スタートしてみると、意外と好評で、それが口コミで広がり、結果的にはほとんどの家はその仕組みで建て替えを行った。街づくり協定運営委員会では、1軒1軒の設計図をチェックしたというから、まさに住民の声が活かされた街並みが実践されたのだ。

### 綺羅街道誕生で何が変わったか

街なみ環境整備事業と、道道岩内洞爺線の道路改良事業は平成14年2月で終了したが、その後、街はどう変わったのだろうか。まずは、人が通りを歩くようになったことだ。お年寄りや子供連れの主婦などが散歩するようになり、3カ所設けたポケットパークのベンチなどで休憩する姿が見られるようになった。そのため商店での買い物客も増えてきているという。

また、住民主体のいろいろな活動も見られるようになった。町民が自ら街道を花で飾る取り組みも含めた花フェスタの開催、広い歩道を使ったフリーマーケットの開催、ふぞろいな形の農作物を安く販売するなど、商店街は今までにはなかった活気が見られるように。

住民が積極的に街づくりに参加するようになって、逆に行政側が尻を叩かれたという場面の例の一つ。住民が花で街道を飾るようになり、ポケットパークに設けた行政が管理する花壇が整備され

ていないということになり、行政職員が個々でお金を出し合って、花を購入、休日に職員自ら花を植えたのだとか。結局はその後、住民からもきれいだと評価され、だれかがインターネットに写真を掲載しているという。

まちづくり推進係時代からこの事業にかかわってきた黒瀧敏雄さんは「主体はあくまでも住民。みなさん一生懸命やったし、行政もそれを手助けするためのサポート役として一生懸命やったと思う。電線の地中化や信号柱のデザイン統一など、今まで無理だといわれてきたことも、あくまでも住民が望んでいるということが認められたのだと思う。例えば行政マンがこういうことをやりたいといっても前例がないからだめだといわれたでしょうね」と、これまでの取り組みを振り返る。

住民主体のまちづくりは今ですら当然のことのようにいわれているが、ハードとソフトを組み合わせる新しい街を形成していく場合、やはり行政側の思いだけでは成し遂げられない面もある。本当のまちづくりとは住民と行政とがともに手を組み、互いの立場を尊重し、それぞれの役割をしっかりと果たすことではないだろうか。

住民と行政とがともに汗を流して完成した綺羅街道は、今後のまちづくりにとっても大きな足跡を残したに違いない。



きれいな花で飾られた綺羅街道